

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 22 年度派遣報告書

—フランス共和国・パリ社会科学高等研究院、フランス語、H22. 12. 27～H23. 3. 19—

平成 22 年編入

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 3 回生

關野 伸之

自身の研究テーマについて

西アフリカ地域において魚は国民の主要なタンパク供給源であり、とりわけ天然資源に恵まれないセネガルにとって海洋漁業は、非常に重要な経済的地位を占め、同国最大の外貨獲得源となっている。一方、農業の衰退、漁民支援政策による漁民・漁船数の増加は水産資源の枯渇の危機をもたらしている。

本研究では、水産資源をめぐり、地域住民、政府、NGO、ツーリズム事業者など、異なる利害をもつアクターが複雑な関係を築きあげ、天然資源のアクセス制限に起因する軋轢が続いているセネガル共和国のバンブーン共同体海洋保護区を主たる調査対象とし、各アクターのレジティマシーの拠りどころとなっている時間・空間的文脈を分析する。セネガルでは国際援助機関の支援を受け、積極的に沿岸域総合管理プロジェクトが進められている。沿岸域総合管理は、異なる利害をもつアクター間の相互作用の中で公益を生み出すプロセスとされる。しかし、地域住民にとって公益とは何だろうか。国民国家 (Nation -state) という定義が曖昧なアフリカ諸国において、公とは何なのだろうか。彼らにとっての公の理解こそが、地域のレジティマシーの理解につながるのではなかろうか。これらの問いの答えをみつけることが本研究の目的である。

研修言語の概要

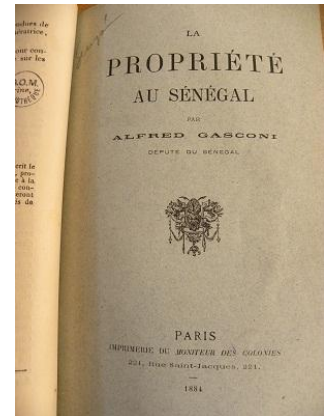
フランス語は西アフリカで広く使われている公用語であり、この地域の調査文献もフランス語のものが多く、フランス語の取得は西アフリカ研究者にとって必須である。最近では、人文・社会科学の文献データベースである *Persée* や、人間と環境をテーマにした *SAPIENS* や *VertigO* といった学術誌が論文をインターネット上で無料公開していることから、他地域の研究者にとっても有用といえる。

語学研修の内容について

派遣先であるフランス社会科学高等研究院・アフリカ研究センターはパリ 6 区に位置し、現代アフリカの社会科学研究機関である。主に人類学や歴史学方面の研究者が多く、150 名近い博士課程学生が在

籍している。当初はセンターで行われるセミナーに週1度参加するという話であったが、自身の研究テーマである資源管理の研究者がいなかったため、所長 Jean Paul Colleyn 氏から IRD の研究者を紹介していただいた。

フランスでは基本的に博士課程学生への部屋の割り当てはなく、センター自体には共用パソコン2台のみの設置であり、結局、他の機関の研究者との面談や国立図書館の文献調査に時間を割くこととなった。国立図書館はフランス国内で出版された書籍のほとんどが所蔵されているが、植民地時代の資料はエクス=アン=プロヴァンスにある古文書センターに保管されているため、期間中に1週間、訪問することとなった。この古文書センターは蔵書を直接手にとって閲覧することができ、またデジタルカメラによる写真撮影が可能であった。



1884年にセネガル使節が記した所有権についての報告書

研修期間中に印象に残った体験や経験

センターで過ごす時間はほとんどなかったものの、在籍する学生とアフリカ諸問題について語りあうことができたのは非常に有意義であった。また、古文書センターでは各国からの研究者と出会うことができ、情報交換をすることができた。

研修中に東北地方太平洋沖地震が発生、続いて起きた福島原発の事故とフランスでは連日トップニュースであった。エネルギーの80%近くを原子力で供給しており、決して他人事とはいえ、研究者の多くがフランスにおいても原発が津波災害により事故を引き起こす可能性は考えられると指摘していた。また、多くの研究者から暖かい励ましの言葉をいただいた。

今回の災害で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、行方不明となっている方々が無事であることを切に願う。



アフリカ研究センターの博士課程学生との食事会

目標の達成度や反省点について

植民地時代の文献についてはほぼ入手できたが、村の歴史を考察するうえで重要な当時の警察の記録を調べる時間がなかった。

また、派遣時期が西アフリカの多くの研究者が調査に出かける 12～3 月（西アフリカの乾季）だったため、フランスの研究者と接触することも非常に難しかった。日本を出発する前にあらかじめ下調べしておき、余裕をもって約束をとりつけるべきだったと反省している。